








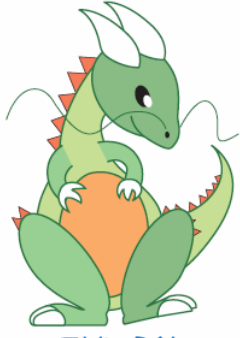







## 伝承カルタ 解説書

五十音	読み札	解説	絵札（下段：出典）
あ	<p>あばれ<sup>てんりゅう</sup>天竜 わがもの<sup>かお</sup>顔で あれくるう</p>	<p>天竜川は急峻で変化に富む地形を流下するので、溪谷美と激流で知られる。また、急流が脆弱な地層を流下することより、土砂生産が活発な河川としても有名である。このような特徴から、この川は美しい自然景観を楽しませてくれる一方で、洪水や土石流などの厳しい河川環境を引き起こす機会も多くあばれ天竜と呼ばれている。</p>	 <p>平成 18 年 7 月 豪雨の記録 天竜川上流の出水 表紙</p>
い	<p>いしがみ 石神の まつ 松がみまもる てんりゅうがわ 天竜川</p>	<p>元和の頃、常泉寺に山伏が寄寓していた。この山伏の法力は大変強かったので、村人は天竜川の洪水が起こらないように祈祷をしてもらっていた。</p> <p>山伏は村人の願いをかなえようと必死で祈祷をした。そのために二十一日目の満願の日についに倒れてしまった。山伏が死に臨んで、水神に松を手向けたのが石神の松であると言われており、今もその石神のまつが天竜川を見守っている。</p>	 <p>現地写真</p>
う	<p>うし 聖牛を く<sup>た</sup>組み立て ていぼうまも 堤防守る</p>	<p>川の流れを弱めるために丸太で組み、根元を蛇籠で固定した聖牛を組みたて堤防を守っている。</p>	 <p>上伊那川たんけんブック p.65</p>
え	<p>え<sup>ず</sup>絵図をみて り<sup>へ</sup>いていぼう 理兵衛堤防 いまもなお</p>	<p>中川村田島には、江戸時代にきずかれた理兵衛堤防のあとが残っており、今も残る絵図にて確認できる。</p>	 <p>天竜川通信 vol.13</p>





<p><b>お</b></p>	<p>おおにしやま 大西山の だいほうかい 大崩壊 わす 忘れてならぬ さいがい 36災害</p>	<p>昭和 36 年 6 月にわずか 1 日にして 6 月の月間平均雨量を越えるほどの雨が降り、伊那谷の多くの場所で堤防の決壊、土石流、がけくずれが起こり、大鹿村では山津波が集落を直撃し、目の前にそびえる大西山が崩れ落ち、たくさんの死者やけが人を出した。</p>	 <p>天竜川通信 vol.10</p>
<p><b>か</b></p>	<p>かすみてい 霞提 さくら そ 桜に染まり とど はる 届く春</p>	<p>霞提には昔出水時に「木流し」に使っていた桜が多く植えられており、今ではその桜が春を届けてくれている。</p>	 <p>天竜川通信 vol.14</p>
<p><b>き</b></p>	<p>きょうくんい 教訓生かし はや ひなん 早めの避難を こころがけ</p>	<p>これまでの災害教訓を生かして災害時には早めの避難をこころがけなくてはならない。</p>	 <p>具満タン DX</p>
<p><b>く</b></p>	<p>くじゅうくたに 九十九谷 けっして ひやく 百まで かぞ で数えない さいがいよぼう 災害予防の い った 言い伝え</p>	<p>九十九谷は誰が教えたか、いつ頃からか、ここには谷が九十九あるのだと伝えられている。だが今正しく数えたら百あるかもしれないが、それを百と数えない。百ありそうだったら二本の指をおってでも九十九と数えなければならない。もし百と数えたら最後、それこそ鬼が出るか、蛇が出るか、村中踏み荒らされてしまうと言う。九十九谷がまた百谷あったころ、その谷底に鬼が住んでいて、大荒れしてその中の一谷が埋まって九十九谷となった時、鬼はいる場所が無くなって逃げ出した。</p>	 <p>信州の治山 2007 p.26</p>

<p><b>け</b></p>	<p>けいほう 警報が な 鳴るまで ま 待たずに じしゅひなん 自主避難</p>	<p>これまでの災害伝承や教訓から大雨洪水警報などの発令前に自主避難して助かった例がある。特に避難遅れによる被災では、「自分だけは大丈夫」といったバイアス効果が働くとも言われるので、避難の決定は人任せにせず「自助」の考えが重要である</p>	 <p>具満タン DX</p>
<p><b>こ</b></p>	<p>こうじんやま 荒神山 てんりゅう 「天竜」 う 生んだ そうせいでんせつ 創生伝説</p>	<p>辰野縁起によると、信濃の山の重なりの中に信濃神二湖（しなのかむいのにこ）と呼ばれる青く澄んだ二つの湖が、一筋に入り江に結ばれて並んでいた。古くから湖の底には魔の神が住み、洪水をきたした。七月七日竜は天に去り、今までの湖の底だったところに野はひらけ、神の怒りに触れることなく嵐に襲われることもなくなった。この時から、竜の住んだ野「竜野」といい、流れる川を「天竜」というようになった。今も荒神山の北の岡の松とすすきの茂る中に、梨恵が竜の昇天を見た跡が秘められているという。</p>	 <p>てんりゅうくん オリジナルデータ</p>
<p><b>さ</b></p>	<p>さんよりこより みこしかついで たいがんで対岸へ</p>	<p>「さんよりこより」という祭りは境内横の広場中央で「鬼＝荒神」役の大人が二人、太鼓を打ち鳴らす。その周りを、飾り竹を持った子どもたちが「さんよりこより」と唱えながら、鬼の周りをぐるぐる回り、鬼が太鼓をたたくと、子どもたちは手にした飾り竹で鬼を滅多打ちにする。これが三回繰り返される。この後、大人たちがご神体を乗せたみこしを担いで三峰川を渡り、桜井の天白社で同じ「さんよりこより」を行う。</p> <p>子どもたちの唱える「さんよりこより」は、「さあーよってこいよおー」の意味がある。鬼をたたくのは、洪水を起こす疫病神（鬼）をたたきつぶし、洪水を鎮める神事とされ、古くから暴れ川・三峰川の水害に悩んできた住民の思いが伺える。また、みこしが三峰川を渡るのは、年に一度、対岸の妃の神のもとへ逢いに行くためだと言われ、「その日は絶対に三峰川は荒れない」とも言われている。</p>	 <p>伊那市観光ガイド HP (<a href="http://ina-kankou.city.ina.nagano.jp/contents/details/sanyori.html">http://ina-kankou.city.ina.nagano.jp/contents/details/sanyori.html</a>)</p>

<p><b>し</b></p>	<p>しとく さいがい 四徳の災害 むらびと 村人たちの しゅうだんいてん 集団移転</p>	<p>中川村(旧南向村)にある四徳は昭和 36 年まで川の上流に約 90 戸の四徳集落があった。しかし 36 災害の際に濁流が 60 数戸の家屋を飲み込み、死者と行方不明者は 7 を数えた。これによって四徳は、集落として 400 年余りの歴史に幕を閉じて、集団移住をした経過がある。</p>	 <p>天竜川サイエンス p.21</p>
<p><b>す</b></p>	<p>すいじん 水神さま みまも ぼしよ 見守る場所に みず りやく 水のご利益</p>	<p>水神さまは、飲み水や農業など生活に使われる水を守る神様、水害から地域の人々を守る神様などいろいろな形でお祭りされている。</p>	 <p>三峰川堤防 現地写真</p>
<p><b>せ</b></p>	<p>せおとちか 瀬音近づき ひなん けつだん 避難の決断 いのちをすく いのちを救う</p>	<p>昭和 58 年災害の折、三峰川上流の旧長谷村で旅行客の救出に当たった方の教訓より記載。</p>	 <p>現地写真</p>
<p><b>そ</b></p>	<p>それまでの じんち こ 人智を超えた さいがい 36災害</p>	<p>伊那谷における 36 災害での死者は 130 人(行方不明 29 人をふくむ)、家屋全壊 516 戸、家屋流出 380 戸、浸水戸数 1 万 2 千 452 戸、被害額 250 億円と、日本の土砂災害史上に残る大惨事となった。</p>	 <p>事業案内 p.4</p>
<p><b>た</b></p>	<p>たかとう 高遠の みぶ いか 三峰の怒りと さくら やさ 桜の優しさ</p>	<p>旧高遠町は高遠城の桜が江戸時代より有名であり人々に癒しを与える。その一方で三峰川は水害の常龍地帯で高遠の人々に牙をむくことを読んだもの。</p>	 <p>上伊那川たんけんブック p.66</p>

<p>ち</p>	<p>ち 散りゆく桜 なつ まま 夏を待つ間に つ ゆ ぞうすい 梅雨の増水</p>	<p>桜が散って夏を待つ前に梅雨の時期になり、天竜川が増水してしまうことを読んだもの。</p>	 <p>具満タン DX</p>
<p>つ</p>	<p>つつみ さくら 堤の桜 いま のこ 今に残る すいぼう ねが 水防の願い</p>	<p>昔、三峰川の青島地区付近では桜が多く植えられていた。この地域は山が遠いということもあり、洪水による出水時には木を切って「木流し」に使っていた。</p>	 <p>天竜川上流河川事務所 HP (<a href="http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/index.html">http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/index.html</a>)</p>
<p>て</p>	<p>てんりゅう 天竜びと れきし おも 歴史と思いを かた つ 語り継ぐ</p>	<p>「天竜びと」とは、天竜川流域に暮らす人々、天竜川をこよなく愛する人々のこと。現在、天竜川上流河川事務所が発行する「天竜川通信（定期）」で天竜びとに思いを語り継いでもらっている。</p>	 <p>具満タン DX</p>
<p>と</p>	<p>とものていぼう 伴野堤防 いち もち 一の勿 さい だいひがい 36災の大被害</p>	<p>36 災害の際に、豊丘町伴野地区で伴野堤防が決壊して大被害をもたらしたことを読んでいます。</p>	 <p>語り継ぐ天竜 27 紙芝居 開墾 堤防一伊那郡豊丘村伴野一 (<a href="http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/hyaka/publication/pbl_tell/pdf/27.pdf">http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/hyaka/publication/pbl_tell/pdf/27.pdf</a>)</p>

<p><b>な</b></p>	<p>なががわ 中川の れきし みまも 歴史を見守る じょうせんじ 常泉寺</p>	<p>常泉寺は今から五百年以上前に開基されたと伝えられており、伊那七福神の1つ大黒天が奉られている。また「石神の松」「行者さま」など天竜川にまつわる伝承を残しており、500年以上も前から中川の歴史を見守っている。</p>	 <p>第1回現地見学会資料</p>
<p><b>に</b></p>	<p>にんげん 人間に おんけい 恩恵もたらす しぜん きょうい 自然の脅威</p>	<p>災害は地域社会や住民に多くの被害を生じさせるが、例えば洪水により氾濫して堆積した土砂は上流からの腐葉土を運び、畑作や稲作に栄養を与える。</p>	 <p>天竜川サイエンス p.15</p>
<p><b>ぬ</b></p>	<p>ぬしぼ 主化けた むすめ む 娘が向かう ふか いけ 深みの池</p>	<p>「深見の池伝説」によれば川路の見鞍の池を埋め立てて新田を作ることになったころ、この地では見られない美しい娘がひとり深見の里に手伝いにやってきた。娘は三日目に行方不明となり、その後しばらくして竜神となって現れた。</p>	
<p><b>ね</b></p>	<p>ねむ 眠らずに つく ど 作った土のう いちまんはっせん 一万八千</p>	<p>平成18年7月の豪雨災害の際に土のう1万8千個を作って、水防のため応急措置を行った辰野町での事例。</p>	 <p>土のう作り</p> <p>京浜河川事務所 HP (<a href="http://www.keihin.ktr.mlit.go.jp/topics/h18/005/index.htm">http://www.keihin.ktr.mlit.go.jp/topics/h18/005/index.htm</a>)</p>
<p><b>の</b></p>	<p>のそこがわ 野底川 いま わす 今も忘れぬ だいほんらん 大氾濫 さいがい 36災害の もうい おも 猛威を思う</p>	<p>野底川は、飯田市街地の北側と上郷との境を流れている小川で、いつもは橋がなくても渡ることのできるほどの浅瀬だった。しかし、36災害の集中豪雨から山崩れ・鉄砲水となると水に勢いがつき、川筋から大きくそれて上郷別府一帯に襲いかかった。現在野底川の道沿いにある夜泣石というのも、このとき上流から流れてきた石である。</p>	 <p>WEB SITE 信州・長野県公式 HP (<a href="http://www.pref.nagano.jp/doboku/sabo/monument/yonaki.htm">http://www.pref.nagano.jp/doboku/sabo/monument/yonaki.htm</a>)</p>



<p><b>は</b></p>	<p>はせ さと 長谷の里 みわ こ かた 美和湖が語る ちすい れきし 治水の歴史</p>	<p>度重なる洪水は崩落の激しい三峰川上流部の土砂を美和湖に流入させ、深刻な堆砂をもたらした。昭和 34 年に完成した。美和湖を観光資源に、またダムは治水、かんがい、発電の機能を維持、増進するために堆砂対策の工事が継続的に行われている。</p>	 <p>南アルプス NET (<a href="http://www.minamialps-net.jp/data/article/684.html">http://www.minamialps-net.jp/data/article/684.html</a>)</p>
<p><b>ひ</b></p>	<p>ひなんご 避難後も みまわ あんぜん 見回り安全 ちいき 地域のちから</p>	<p>避難した後も地域の見回りを行うことにより、更なる被害が出ないように地域ぐるみで取り組んだ。旧高遠町松倉地区では伊那警察署が災害時に活躍した。</p>	 <p>具満タン DX</p>
<p><b>ふ</b></p>	<p>ふだん 普段から こころ 心がけよう きんじよ 近所づきあい</p>	<p>普段から近所づきあいを行うことが、災害時の地域防災力の底上げになる。このことを「共助」の重要性とも言うことができる。</p>	 <p>具満タン DX</p>
<p><b>へ</b></p>	<p>へんか 変化する しぜん まな 自然に学ぶ せんじん ちえ 先人の知恵</p>	<p>災害時の変化する自然条件に対して経験のある先人の知恵や知識を今後とも伝承していく必要がある。</p>	 <p>中国新聞 HP (<a href="http://www.chugoku-np.co.jp/Disaster/An200703060347.html">http://www.chugoku-np.co.jp/Disaster/An200703060347.html</a>)</p>

<p><b>ほ</b></p>	<p>ほかけ船 てんりゅうがわ 天竜川を おうらい 往来し いまむかし 今は昔の おもいでばなし 思い出話に</p>	<p>天竜川の東と西の人々が行き来をしたり、荷物を運ぶため、昔からほかけ船が使われてきた。天竜川に橋がかかるのは明治時代以降のことで、それまで人々にとっては舟運がたよりだった。昔の天竜川は激流で、船を操作するのも命がけだったことだろう。</p>	 <p>上伊那川たんけんブック p. 53</p>
<p><b>ま</b></p>	<p>まいぼつりん 埋没林 むかしようす 昔の様子を かたつ 語り継ぐ</p>	<p>文字どおり“埋もれた林”のことで、林が埋もれる原因には、河川の氾濫による土砂の堆積、地すべり、海面上昇などさまざまなものがある。最近、旧南信濃村では池厚くずれて池や川をせき止めた土砂に埋もれていた巨木たちが川底から頭を出してきた。その埋没林を調べてみると、その森林が生育していた過去の災害環境を推定する大きな手がかりとなる。</p>	 <p>遠山川の埋没林</p>
<p><b>み</b></p>	<p>みなとまち 湊の町に ごうらき 豪雨と来たる どせきりゅう 土石流</p>	<p>平成 18 年 7 月豪雨で岡谷市湊地区では 7 名もの方々が亡くなるほどの規模で、悲惨な土石流がおこった。</p>	 <p>アジア航測 HP (<a href="http://www.ajiko.co.jp/bousai/okaya2006/okaya.htm">http://www.ajiko.co.jp/bousai/okaya2006/okaya.htm</a>)</p>
<p><b>む</b></p>	<p>むかし 昔より りゅう 竜がおさめる てんりゅうがわ 天竜川</p>	<p>天竜川の名前の由来は川の流れ出る諏訪湖の近くにある諏訪神社に祭られている竜神からきているという説があり、昔より竜がおさめる川と言われている。また、天竜は「天流」「天龍」など歴史的な用語の変遷も興味深い。</p>	 <p>天竜川上流河川事務所 HP (<a href="http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/hyaka/tenryu.html#02">http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/hyaka/tenryu.html#02</a>)</p>



<p><b>め</b></p>	<p>め 目をこらし みみ 耳をすませて し 知る予兆</p>	<p>災害が起こる前には何かしらの予兆があるので、それを見逃さないように感覚を鋭くする必要があります。</p>	 <p>具満タン DX</p>
<p><b>も</b></p>	<p>「もうだめだ」 あきらめる前 に こえだ 声出して</p>	<p>災害に遭遇してしまい「もうだめだ」と思うときもまず声を出して周りの人に知らせることが大切である。</p>	 <p>具満タン DX</p>
<p><b>や</b></p>	<p>やみ なか 闇の中 きけん 危険を し 知らせる はんしょう おと 半鐘の音</p>	<p>災害時や火災の時に半鐘は周囲の人々に非常体制を告げる音であった。今はその音も消えつつある。</p>	 <p>消防博物館 写真</p>
<p><b>ゆ</b></p>	<p>ゆるがない おも 思いを込めた そうへ いていぼう 惣兵衛堤防</p>	<p>市田、座光寺、上郷の段丘の下の田畑があった所は、毎年のように天竜川が氾濫して幾たびも大きな被害を受けていた。飯田藩主の堀親長は、万匠町に住む有名な石工の中村惣兵衛に堤防を作るように命じた。惣兵衛は1750年に築堤工事にとりかかり、1752年、当時としては驚くべき速さで完成させた。</p>	 <p>惣兵衛堤防 下伊那川たんけんブック p. 66</p>
<p><b>よ</b></p>	<p>よだぎ 与田切りに ひばなち 火花散らして なが おおいわ 流れる大岩</p>	<p>天竜川支川の与田切川流域では百間の山肌が大きく崩れ、土石流が頻発している。その土石流は岩と岩がぶつかりあい、夜に発生するとまるで花火のように夜空に光ってうつる。</p>	 <p>上伊那川たんけんブック p. 61</p>

<p>ら</p>	<p>らいちょう 雷鳥の い 出づる山頂 こうてん 荒天で さとかわ みずかさ 里川の水嵩 しゅんじ ぞうすい 瞬時の増水</p>	<p>夏の不安定な天候は中央アルプスの山岳地では急変し突然の降雨を発生させる。晴れている天竜川の支川では一瞬に水位が上昇し危険な状況になるので注意が必要である。</p>	 <p>WEB SITE 信州・長野県公式 HP (<a href="http://www.pref.nagano.jp/soumu/koho/symbol/symbol.htm">http://www.pref.nagano.jp/soumu/koho/symbol/symbol.htm</a>)</p>
<p>り</p>	<p>りゅうさい 竜西に めぐ 恵みをもたらす いすい ようすい 井水と用水</p>	<p>竜西一貫水路は食料増産のために作られた、中川村葛島の南向発電所から放水された水が、サイホンで天竜川の下をくぐって竜丘や川路の段丘の上まで運ばれている。田植えのころになるとあふれるほどの水をたたえて竜西をうるおしている。</p>	 <p>下伊那たんけんブック p. 49</p>
<p>る</p>	<p>でら るり寺の あまご かみ 雨乞いの神 あお がしら 青じし頭</p>	<p>高森町のるり寺には雨乞いの神として「青じし頭」が奉納されており、この青じしを外に出すと雨が降ると言われている。</p>	 <p>高森町 HP (<a href="http://www.town.takamori.nagano.jp/sangyo/kankou.htm#ruriji">http://www.town.takamori.nagano.jp/sangyo/kankou.htm#ruriji</a>)</p>
<p>れ</p>	<p>れんけい 連携を さいゆうせん 最優先に ぼうさいかつどう 防災活動</p>	<p>どの町にも住民によって水防団が作られており、洪水を警戒したり、土のうを作って浸水を食い止めたり、地域住民で連携して防災活動を行っている。</p>	 <p>上伊那たんけんブック p. 73</p>

<p>ろ</p>	<p>ろうりよく  <b>労力を</b>  <small>ついで</small> <small>おこな</small>  <b>費やし行った</b>  <small>ぼうさいかつどう</small>  <b>防災活動</b></p>	<p>昔の人々は洪水から町や村を守るために共同で命をかけて河川工事を行った。</p>	 <p>上伊那川たんけんブック p. 65</p>
<p>わ</p>	<p>わす  <b>忘れるな</b>  <small>ひ</small> <small>さいがい</small>  <b>あの日の災害</b>  <b>いつまでも</b></p>	<p>過去の災害をいつまでも忘れないように伝承していく必要がある。</p>	 <p>具満タン DX・事業案内 p.4</p>